

ごっこ遊びにおける 4歳児のコミュニケーション・パターン

久 富 節 子

幼児は4歳に近づくと、言葉をあやつる能力も格段に増し、3歳児のパターン・プラクティスのような自分ひとりで行なうことば遊びから、ともだちと言葉を使って場面を作り上げていくという高度なごっこ遊びの仲間入りができるようになってくる。しかし、かけ声と動作が混在した2歳児のごっこ遊びとは異なり、高度なごっこ遊びには、どんな遊びに作り上げるかという計画性や、それぞれの場面の登場人物や役割を、言葉を使って割り振る、という作業が必要となる。5歳になればこれらの方略はかなり上手に使えるようになるのであるが、3—4歳ではそれができないため、遊びの場面ではつぎの例に見られるように年長者の友人に従属せざるを得ない。

例1：お出かけごっこ（X子（友人）：5歳2ヵ月；A子：4歳0ヵ月）

X：あたし1年生よ。1年生は、さき、行っちゃうのね。

A：あたしも1年生よ。

X：でもちがう組よ。赤ちゃん連れて行かなくちゃ。4歳の子、お出かけ行くから待ってらっしゃい。

A：あたしも行く。

X：だめ。あなたは熱。

A：うそここに、熱、下がったのね。

X：下がらない。

A：下がるよねー、ママー（と母親の助けを求める）。

使える語彙も少なく、力の弱い3—4歳児であるが、ことばの学習の真ただ中にある彼等は、3歳児のパターン・プラクティスにまさるとも劣らない、なんらかの、ある種の集中訓練をしていると思われる。2人の幼児、A子、B男を3歳10ヵ月から4歳2ヵ月までの4ヶ月間、2つの家庭で観察し、平均5日おきに30分づつ収録した各9時間分のごっこ遊びのテープ資料の分析をとおして、それが何であり、どのような機能をもっているのか考察してみたい。

1. 1 「xxx って言って」という会話パターン

A子に特徴的に見られるのは、会話の相手に「xxx って言って」と自分で考えたセンテンスを言わせるパターンである。会話の長さには差があるものの、18回の収録中、6回のテープに見られる。

例2：着せかえ人形ごっこ（A子：4歳1ヶ月；Y男（兄）：7歳4ヶ月）

A：「おかあさん、おかあさん」って言うの。

Y：おかあさん、おかあさん。

A：はい。こんど、だれかちゃんがあります。「だれかちゃん、どうぞ」って言うの。

Y：だれかちゃん、どうぞ。

A：あらまあ。はだかだわ。「アッハッハ」って言うの。

Y：（思わず本当に笑いだす）

A：みんな笑っちゃうのね。「笑わないで」って言うの。

Y：（笑いながら）なんでー？

例3：おままごと。（A子：3歳11ヶ月；Y男：6歳2ヶ月）

A：お父さんごはんですよ。「はい」って言うの。

Y：あとで。あとで食べまーす。

A：「まってよー」って言うの。

Y：まってよー。

A：わかった。

話に構造化を必要とし、しかも参加者の間で場の前提を共有しながら話を紡ぎ上げていくごっこ遊びのような場面では、頭の中に描いた表象をすべて自分一人で処理することはできない。ことばを外に向けて発信し、相手に伝え、相手からのフィードバックを得たうえで、ターンテイキングを互いにとりながら話を作り上げていかななくてはならないのだ。例2、例3で見える限り、A子はごっこ遊びにおける“ターンテイキング”という「型」の必要性に気がつきはじめたことが感じられる。

例2、例3のA子の会話相手は、3歳年上の兄であり、A子の年長者として遊んであげる立場をとっているため、A子はこのびのびと自己をことばに託している。しかしつぎの例では相手が年齢の近い友人であることから、兄のときのように思いどおりにはならない。

例4：おままごと（A子：3歳11ヶ月；Z子（友人）：4歳5ヶ月）

- A: 「おねえさん、待ってるかなー」って言うの。
 Z: だってあたしがおねえさんよ。
 A: いいの。「おねえさん、待ってるかなー」って言うの。
 Z: だめなの。
 A: 「うふふ」って笑うの。
 Z: (無言)
 A: 「来たらしい」って言うの。
 Z: (無言)

1. 2 「xxx って言う」の起源

これまでのところで、会話の相手との関係により差はあるものの、A子が「xxx って言う」というパターンを使うことで会話の持つ“ターンテイキング”をとれることに気づきはじめて様子を見てきた。ではこのパターンはどのような過程から導き出されたものであろうか。今回の分析範囲の期日をさかのぼって資料を探してみると、A子は3歳5ヶ月あたりから、兄との日常の会話の中で、このパターンをよく使いはじめ、10日おき程度の割合でテープに出現させている。しかし初期の頃はその発話は単発的で、相手と会話を織りあげる意志はまるで見られない。

例5: 日常会話場面。(A子: 3歳5ヶ月; Y男: 6歳8ヶ月)

- Y: A子ちゃんいけないの。わるいの。
 A: 「わるくない」って言うの。
 Y: わるくないの。

例6: 日常会話場面。(A子: 3歳7ヶ月; Y: 6歳10ヶ月)

- A: (鼻歌まじりにひとりごと) がんばれー。がんばれー。
 Y: うるさいなー。
 A: 「がんばれー」って言うの。
 Y: がんばれー。

例5, 6ともにこれらの会話のあとには数十秒の無会話の時が流れ、その後別のテーマの会話に進んでいく。この2例から見ると、A子は「相手がこう言ってくれば自分は嬉しい」ということがらを相手の発話という形で言わせていることがわかる。

また、つぎの2例では、逆に「相手はたぶんこう言いたいだろう」と思うことをやはり相

手に言わせている。

例7：ねんど遊び。(A子：3歳6ヶ月；Y男：6歳9ヶ月)

A：もらってもいいでしょ。(Y，無言)「もらうわけ，もらうわけないでしょ」って言って。

Y：もらうわけないでしょ。

例8：ねんど遊びつづき。

A：へなちょこじゃん。「へなちょこじゃない」って言うの。

Y：へなちょこじゃない。

A：(鼻歌まじりのひとりごと)へなちょこYくーん，へなちょこYくーん。

これらの例5，6，7，8から考えると，「xxxって言って」という「型」のなかに自分や相手の欲するセンテンスを入れて文を作ると，会話に必要なターンテイキングという部分ができ上がる，ということをA子はまさに発見学習しつつあるように思える。そしてここで発見したことを，4，5カ月後のごっこ遊びの中で応用し，より長く，より精練された会話作成へと発展練習させているのではないだろうか。A子にとって3歳から4才のこの時期はコミュニケーションにおける「型」の集中訓練期なのである。

2. 1 集団内独話を含む会話パターン

もう一方の資料提供者B男は，A子よりおとなしい。姉M子との年齢差が2歳1ヶ月と，A子とその兄との場合より歳が近いと，上のきょうだいから優しく遊んでもらうということもA子より少ない。B男に特徴的なことは，集団内独話である。18回の収録中8回に見られ，そのうちの3回は1分以上の長さで続いている。

例9：おもちゃ遊び。(B男：4歳0ヶ月；M子：6歳1ヶ月)

M：あ，これ(トラックのミニカー)貸して。

B：(ほかのミニカーを取り出し)買ったばかりの，貸してあげるね。

曲がるスピード・バギーなの。

これ道路になっちゃったの。

階段になったの。

ドアーすぐ落ちちゃうの。

M：(Bのほうにトラックのミニカーを向けて)行きますよー。行きますよー。

例10: おもちゃ遊び。(B男4歳2ヶ月; M子6歳3ヶ月)

M: エレベーター, エレベーター。エスカレーターも。うーんと。

B: (やっと聞きとれる小さな声で) タクシー, タクシーが来たの。タクシーが来たの。タクシー坂道登れない。タクシーが落ちそうなの。タクシーが落ちそうなの。タクシーが落ちそうなの。タクシー, ドブに落ちそうなの。タクシーがね, タクシーがね, 川に落ちそう。タクシーが登ってきたの。タクシー, タクシー, ここにいるの。タクシー, うんとね, タクシー来たの。タクシーが来たの。ほら, みて。見て。みて。見て。みて。見て。タクシー, タクシー, 寝ちゃったの。

M: (ちらちらとBを見るが, 無言)

ピアジェ (1959) に言わせれば, 集団内独話は, 他の自己中心的言語 (反復, ひとりごと, など) の中でもとくに出現頻度の高い非社会的な言語行為ということになるであろう。たしかに例10では, Bは, まるでひとりでやぶの中にどんどん分け入って行くように, 状況を, Mに対してというよりむしろ自分にむけて解説しつづけている。しかしBは, 遊びに参加しているかぎりには, 決してMの存在と, 場の状況を忘れてはいない⁽¹⁾。C. ガーヴェイ (1987) は幼稚園児たちが, 2, 3人でいっしょに遊んだり, 活動しているときには, 相手が自分に注目していない可能性を考慮にいれたおしゃべりをする人が多いことを述べている。E. ゴフマン (1976) は, これを「会話の開放状態」と名づけており, この状態では, 話すことが重要な活動であることも, 単に付随物であることも, ひとりごとであるときも, 相手の反応を期待した話しかけのときもあることを指摘している。つまり, 例10のBのおもちゃのタクシーに関する実況放送は, 自分に向けると同時に, Mにも共有してほしい事態と考えることができるだろう。5歳児になれば, 会話の切れ目切れ目に, 助詞「ね」を挿入させたり, 相手のあいづちをフィードバックにしながら, 相互作用的, 相互依存的にかかわりあいながら, 場面を作り上げられるようになるのであるが, 3-4歳では, 話しの区切りの合図を知らせたり, 話しにメリハリをつけたりすることには未熟である。前述のA子はその点に気づきはじめ, 会話の相手とターンテイキングをすることに焦点を合わせているが, B男の場合は, ただ自分が大切だと思ふことがらを, だらだらと外言化させてしまう。B男にとっては, コミュニケーションの「型」よりも, むしろ「何を話すか」という内容のほうが重要なのだ⁽²⁾。

2.2 物語と会話の違い

「何を話すか」を訓練する場として忘れてならないのが, 子どもが物語を作り, 話す場面

である。物語作りの場合にはB男のようにひとりごとで話を作っていても、他人がかかわらない限り何の問題もない。3, 4歳の幼児が絵本のストーリーを楽しげにひとりで再生している姿を見ることは多いだろう。ところがきちんとした会話ができるためには、聞き手と話し手の役割を相手と交代しながら、新しいインフォメーションをたがいに確認しあってストーリーを付け足していかななくてはならない。

内田(1990)は、子どもを二人ひと組にして、二人で共同してひとつの物語を作り上げるという「かわりばんこのお話し作り」の作業を、4歳児どうしと、5歳児どうしのペアに課して、その結果を考察している。そこで明らかになったことは、5歳児の場合は、時間を表わす接続詞や副詞をじょうずに使って、相手の話しにきちんとつながる話しを作ろうとするが、4歳児はそれができない。4歳児は二人ともそれぞれ勝手なテーマで独立した話しを作ってしまう、協調しようとししないのだ。例えば一人の子どもは自分が発した「木が倒れてきた」ということばにこだわりつづけ、相棒であるはずのもう片方の子どもは、やはり自分が発した「死ぬ、殺す」ということばにこだわりつづけて、かわりばんこに話しをつづけさせても、すぐに自分のテーマに戻ってしまう。ところが5歳児の場合には、相手の言ったことの意味がはっきりつかめない場合には、質問して確かめる。つまり5歳児は、相手の話しを取り入れながら、自分の話しの構想をたてることができる。そして、その作成過程を自分で制御するセルフ・モニタリングの機能を働かせることができるのである⁽³⁾。

3. 1 外部モニタリングと内部モニタリング

いままでに見てきたことがらを、ヴィゴツキーとバフチンの認識形成理論と照らし合わせて考えてみよう。

ヴィゴツキー(1962)は、人間の心(高次精神機能)の発達には、社会的相互交渉、とくに心理的道具としての言語・記号による媒介が必要であることを幾度も説いている。さらに重要なことはヴィゴツキーのいう「言語」とは、抽象的な language ではなく、コミュニケーションに使われる記号システムとしての発話 speech なのである。

……個人の高次精神機能は社会生活に起源を持つ。ヴィゴツキーは精神間、精神内の間で構造と過程のきわめて重要な発生的関連があることを強調する。ヴィゴツキーによれば、子どもの精神機能は二度(あるいは二つの平面 plane で)現われる。まず、精神間(社会的平面: 対人間)に現われ、続いて精神内(心理的平面: 子どもの内面)に現われる。精神機能は精神間機能から精神内機能へと内化されるのである⁽⁴⁾。

このことから考えるとA子もB男もその高次精神機能は「対人間」の段階にあり、スピーチを媒体としての練習活動は彼等の精神発達上の大仕事であることがわかる。B男の集団内独話がいずれ内言化していくことは周知の事実であるし、A子のように「xxって言って」と外言化しなくても、年齢がすすめば自分の心の中で会話のやりとりを瞬時に構成、再構成できる。また、つぎの例のように、同じパターンを使って異なった効果を生み出すこともできる。

例11: ままごと遊び。(A子5歳3ヵ月; Y男4歳3ヵ月)

A: (人形をひったくり) あたしのなんだからね!

Y: (無言)

A: 「A子のバーカ」って言って。

Y: 「A子のバーカ」

A: バカって言ったらおまえがバーカ。

バフチン(1987)は、発話(utterance)を構成する声(voices)が、主体の意思や志向とそれを表わすアクセントや音声(内的・自己モニタリング)だけでなく、主体が発話する相手や場面(文脈, 社会的環境)の意思・志向という外部モニタリングとしての声(voice)も反映すると述べている。

ある発話(声)はけっして話す主体によって任意に決定されるのではなく、最初は相手・他者の声を借りる(他者の声を通して話す: 腹話する ventriloquating)ことから始まり、そこで自己の声(voice)と他者の声(voice)が出会い、衝突しあうような内的な対話過程を通して、主体の声が成立するのである(対話性原理: dialogicality)⁽⁵⁾。

つまり、A子は、「xxって言って」という形によって、他者の声を借り、自己の声と衝突させながら、それを外言化させる対人コミュニケーションの練習をし始めたのであり、B男はその衝突しあっている内的な対話過程を、独話という形で外に見せてくれているのである。そして「主体の声が成立する」ためには、この両方の練習作業が人間の精神の発達上不可欠なのである。

コミュニケーションはそこに参加する人々の共同作業によって成り立つジョイント・ベンチャーである。そこには「何を話すか Telling what」という話の内容だけでなく、「いかに

話すか Telling how」という会話をとりかわす方法も大切な要素となっている。また、モニタリング、視点の移動などのストラテジーも必要とされる。人間が生きるための最大の宝物である言語獲得のために、4歳児はこれらの方略を駆使できる力の獲得にむかって真剣に練習を積み重ねているのである。

注

- (1) ある話題が引きがねになって、独話が思考に傾いてくると、その場の話題から離れていくこともある。Bは、食事中の会話で、「食べるとおなかが大きくなる」というテーマになったとき、昼間に出会ったおなかの大きな人（妊婦）について思いをめぐらせ、その場の会話から隔離した独話の世界に入り込んでいっていることが観察された。
- (2) Bにも3歳10ヵ月のときに、「xxxって言って」と姉に要求している会話が2回見られたが、いずれの場合も姉が拒否している。
- (3) 『ごっこからファンタジーへ』 p. 223-236.
- (4) 『新・児童心理学講座』 p. 46.
- (5) 「問題解決での他者の眼の役割」 p. 82.

参考文献

- Garvey, Catherine. *Children's Talk*. William Collins Sons & Co., 1984. (ガーヴェイ・C (柏木恵子, 日笠摩子共訳) 『子どもの会話』サイエンス社, 1987.)
- Goffman, Erving. Replies and Responses, *Language in Society*, 5, 257-313, 1976.
- 川村久美子「知識の獲得」『新・児童心理学講座』金子書房, 1991.
- 桑野隆『バフチン—対話そして開放への笑い』岩波書店, 1987.
- Piaget, Jean. *Language and Thought of the Child*, Routledge & Kegan Paul, London, 1959.
- 田島信元「問題解決状況での他者の眼の役割」『現代のエスプリ』No. 314, 79-91, 1993.
- 内田伸子『ごっこからファンタジーへ』新曜社, 1990.
- Vygotsky, L. S. *Thought and Language*, The MIT Press, Cambridge, 1962. (ヴィゴツキー『思考と言語』上, 下, 柴田義松訳, 明治図書, 1962.)